



イスラエル旅行ノート (’99.9/3~10) 歴史と宗教でつくられた国

つちしたのぶひと

1999年9月3日(金)

沖縄から参加するのに東京で前泊する。ホテルからリムジンバスに乗り、成田空港に向かう。10時、空港内日案内板に集合ということだったが、誰もいない。出発日を間違えたのかと思って、近畿日本ツーリストに電話したら、間違っていないという。そうしていると、昆さん(「農業経営者」編集長)から声がかけられた。

チケットカウンターに行ったら、人が集合していた。そこで、挨拶。

イスラエルには初めて行くので、期待が広がる。久しぶりのグループ旅行。新しい出逢いがあるのではと、心ときめく。

イスラエルの予備知識は、何も持たないで出発する。その方が、受け取る感じが新鮮になるからである。

成田を9月3日12時に出発して、ちょうど12時間で、スイスのチューリッヒ空港に着いた。成田を飛び立ち、新潟、ウラジオストックを抜け、ロシアの上空を飛んで、スイスに着く。実にロシアは広い。列車で行けば、ホントに大変。

飛行機の中で、「依頼された原稿」の準備を始めようと思っても、パソコンを広げるスペースが小さく、まったく困った。そのため、少し分厚い本「環境保全型農業論」を一生懸命読んだが、眠ったり、ワインを飲んだり、食事をしたりで捗らず、まったく仕事にならなかった。スイス航空は、満員だった。スチュワーデスは日本人スタッフがついて、笑顔がかわいい。

グループ旅行で、まったく初めて出会うヒトばかりなので、どう話していいかわからず。私の隣の席は飯島さんで、一生懸命ヘブライ語の勉強をしている。もう一方の席は倉持さんで、たくさんワインをあけていた。

最近台湾や中国の飛行場ばかり見ていたが、ヨーロッパの飛行場は少し雰囲気が違う。空の色が澄んでいる。ジェントルマンやレディが歩いている。女性がすくっと歩いて、Gパンがよく似合う。

スイスの時計をといってもいいものが見つからず、一番安いスウォッチを買った。チューリッヒ空港で4時間ほど待たされた後、イスラエル・テルアビブ空港行きの飛行機に乗った。

1999年9月4日(土)

イスラエル時間の9月4日午前2時、テルアビブ空港に到着した。テルアビブ空港は24時間営業のようである。

チューリッヒ空港を夜10時に出発したので、4時間かかった。チューリッヒからアルプスをこえて、イタリア半島の東側をずらりと飛び、ギリシャ、地中海をぬけて、テルアビブ空港に着いた。

飛行途中のイタリアの夜景のきれいなことは、何ともいえず魅力的だった。光の色が、オレンジから白緑まで、実にパステルカラーの光の色というのかな。そのライトアップ技術に感心した。窓側だったので、久しぶりに空の旅を満喫した。

9月4日は土曜日で、安息日である。

正確には金曜日の日没から土曜日の日没まで、ユダヤの戒律ですべての生産活動を中止する日。火を焚いてはいけないし、テレビのスイッチもつけてはいけないという。店、バス、役所すべてお休み。

テルアビブは、夜遅くまで人が街を歩いている。街のイメージとして、建物も沖縄によく似ている。飛行場からダン・パノラマホテルまで、20分くらいのところ。ホテルに着いて、前日にイスラエルに来た中村さんと打ち合わせをしていたら、朝5時になっていた。時間の感覚を失っている。

もう太陽は上がっていて、ホテルから地中海が見える。

青い空と青い海。沖縄の海より、少し深い青色である。ボートが、海の上を走り抜けている。ホテルにはプールがあり、そして目の前には、ジャンピングボールの遊園地もある。何か気分的に落ち着く雰囲気のところである。

テルアビブのダン・パノラマは、地中海に面したいいホテルだ。朝ご飯は、安息日だったのでバラエティも少なく、何を食べるのかわからない状況であった。まずパンが豊富である。しかし、あまりおいしそうなものはない。

今回の旅行の朝ご飯は、すべてバイキング方式である。好きなものを選んでいいが、何を選んでいいのかわからず戸惑ってしまう。鯖の焼いたものがあり、それは日本と同じ味だった。

「ピタ」というパンがおいしい。中が空洞になっていて、大きさは20cmくらい。これをちぎって、空洞になっているところに、サラダやヒヨコ豆のクリームを入



ビーチで出会った無邪気な子供たち (テルアビブ・川瀬善行氏撮影)



地中海の行き止まりイスラエルは、きれいな海はあるけど魚は獲れない海です (テルアビブ・小塩幹雄氏撮影)



訪問初日に行った事前レクチャー



テルアビブ郊外の古都、ヤッファ



再開発が進むテルアビブの市街とゴミの山



豊富な野菜、果実が並ぶテルアビブのマーケット

れて食べる。それが何ともいえぬおいしさ。インド料理のナンに似ているが、フンワリとやわらかく、その食べ方を知ると病みつきになる。

イスラエルの朝ご飯は、「ピタ」ではじまる。

9月4日は、イスラエルの紀元前に作られた歴史の都、ヤッファを訪問した。まぶしい太陽、煉瓦で作られた街。2000年以上も存在し、そこに今も人が住む。テルアビブの「テル」はヘブライ語で「丘」という意味で、階段が妙に幾何学的でなく、人間的なふくらみをもっている。

ヤッファは、さまざまな歴史、トトメス3世、新約聖書(ペテロ使徒)、ギリシャ神話(アンドロメダとペルセウス)、十字軍、ナポレオンという聞いたことのある言葉が登場する戦略的な港町。

地中海に面したアラジンという店で、ランチをとる。

イスラエルのビールは、ホップも緩やかで、どちらかといえば、沖縄のビールに似ている。渴いたのどをうるおすのにいい。私は、ギリシャ・ナスのサラダを頼んだ。

ペースト状のものが出てくる。はじめは、パンにつけて食べるバターかと思っただけ、それがサラダだった。ペーストに混じっている種子は、ゴマかなと思っただけ、ナスの種子だった。トルコサラダは、トマトと辛いピーマンのペースト。パンチが効いている。とりあえずピーフ・ステキを頼む。まずまずの焼き肉といった感じだった。

ユダヤ教は戒律があり、ブタを食べない。

旧約聖書には「食していいものは、ひずめの割れている動物で反すうする動物」とある。ブタは、ひずめが割れているが、反すうしないので食べない。ラクダは、反すうするが、ひずめが割れていない。食べていいのは、牛と羊、山羊である。

イスラエルでは、ブタは飼育されていない。イスラエルで、輸出用にブタを飼おうという人達がいたが、宗教党が、「ブタをイスラエルの地上では飼ってはいけない」という法律を出し、国会で決まったという。ブタを飼育している人たちは、地下室をつくり、そこでブタを飼っているという。まさにユダヤ人らしい。

古川氏は、セントピーターズフィッシュを食べる。これも、新約聖書のペテロ使徒が、食べたというサカナ。イスラエルのガラリヤ湖(海面下250mにある淡水湖。琵琶湖の4分の1の大きさ)で発見されたサカナ。キブツ(農業生産共同体)が養殖をはじめた。その品種名はガレリア・テラピアで、日本でもよく知られているサカナである。イスラエルが発祥の地とは知らなかった。味はタイによく似た味。

旧約聖書では、サカナを食べるにも戒律があり、「鱗のないもの、尾鰭のないもの」は食べてはいけない。ウナギ、アナゴ、エビ、イカは食べられない。

目の前に広がる、きれいな地中海。そこにはヨットが浮かび、実に豊かな自然を確立している。太陽の陽ざしが、海に溶け、沖縄よりも少し濃い青い海が、



かすみ草の農家、バスカル社を訪問



水あげ中のかすみ草。優れたポストハーベスト技術を持っている（バスカル社）



ハウスは通気性のよい構造になっている



アグリテックで見た、ナツメヤシの管理・収穫用機械



アグリテック 99会場風景



ティベリアから死海へと続く道の途中で広がる一面の綿畑

眼前に広がり、風がさわやかに吹き抜ける。軽飛行機が、宣伝用の幕をひっぱりながら飛んでいる。宣伝方法も違う。景色がすばらしいところでのランチは、おいしさよりその雰囲気がいい。ピール一本、ステーキ、パン、ギリ・ナスのサラダでだいたい3,000円くらい。少し高いけど、マアママかなと思う。ホテルに戻り、農業セミナーを開催。イスラエルという国の特徴、そしてユダヤの商法、農業生産のあらましなどを聞く。

イスラエルの人たちは、自分の国は開きによって確保するという考え方が強い。独立宣言した1948年から、すぐに独立戦争が始まった。イスラエルは、18歳になったら男は3年、女は2年の徴兵制がある。すべてのイスラエル人が、それを受ける。軍隊かボランティアのどちらかを選択する。男たちは、子供のころから空軍をめざし、猛勉強をするという。それは、単に学力だけでなく、体力も要求される。兵役が終わると、職に就くものや、そこから大学受験をするものと様々。ここでの特徴は、単純な日本的なガリベンが、この兵役を通じて淘汰されること。真のリーダーシップが発揮される。

さまざまな生活価値観をもった同世代のヒトが集まるので、そこで人生の進路を決めるものも多いという。また集団見合いみたいな感じでもある。兵役を終了しても、1年に3週間は兵役業務がある。

今回通訳とガイドをしてくれる西郷さん、その兵役業務があると、1年の仕事をじっくり反省し、整理する時間が3週間くらいあるので、いいという。イスラエルの農業の特徴は、キブツという仕組みである。農業生産共同体。社会主義の国ロシアにいたイスラエルの7人の人たちが、自分たちの理想を掲げ、はじめた。参加するものは、共同で利益を分け合う。個人の収入はなく、そこで生活するものすべては、支給されるという理想の世界。現在イスラエルの人口は、600万人。そのうちキブツに従事する人たちは13万人。イスラエルの農業生産の40%を占めるという。今回は、4年に一度おこなわれるアグリテックの視察とあわせて、キブツをみたいというの大きな目的である。

イスラエルは、1948年5月14日に独立し、その時の人口は、36万人であった。独立すると同時に、戦争が始まった。またその時は、荒地と沼地の国であった。そのために、ユダヤ基金が設立され、世界からそのユダヤ基金を集めて、イスラエルの国に植樹した。植樹の数は、1億本を超えるという国家事業であり、緑豊かな国となっている。それは、旧約聖書でアブラハムがイスラエルの国に来た時に、最初に植樹したということに因んでいるという。その木は、ギョクリユウの木といわれる。

テルアビブの気候は、年間降雨量が700mmくらいという。北部のガリラヤ湖周辺は、1,200



mm。その水が、イスラエル人の水の源となり、全国にくまなく送られている。南部は、降雨量が200mmくらいで、荒野年間降雨量200mm以下は、沙漠という。その近くに死海があり、死海周辺の降雨量も200mmという。海面下400mにあり、塩分は驚異的な35%。

その表面に生息しているのが、ドナリエラという藻類。ドナリエラは、日本のテレビでも宣伝されている。その藻類を大量培養して、商品化している。葉緑素、βカロチンが豊富な食材で、21世紀の食べ物ともいわれている。

西郷さんは通訳（彼は、イスラエルのガイドの国家資格を持っている）をしていたので、鳥取大学の遠山教授（沙漠を緑にということでも世界的にもユニークな存在）や故糸川英夫教授を案内したという。沙漠をどう緑化するかが、イスラエルの大きなテーマともいわれる。

1日目のセミナーではさまざまな話が、3時間近く話されたが、印象的なことをまとめてみた。

イスラエルという国が、自分たちの祖国であり、それを良くしていこうとする姿勢に、実に深い関心を覚えた。イスラエルは、「宗教で形成された国」である。日本は、宗教というものをなくしている。これは私を含めてですが、宗教が、食べるものまで制限するというところに、非常に興味がある。

例えば、食べてはいけないブタを食べてしまった。それは、とんかつだった。余りにもおいしいので、ビックリしてしまった。そして、食べてはいけないにもかかわらず、食べたくなってしまう自分

をどう思うのか？
ユダヤ教を信じているイスラエル人に聞いてみたいものだ。

1999年9月5日(日)

イスラエルは、金曜日と土曜日がお休み。日曜日からは、仕事はじまる。

1週間は、日曜日からはじまる。月曜日から始まらないという。そういえば、カレンダーの1週間は、日曜日からはじまっていることに気がついた。

今日は、かすみ草を11ha生産する農家、パスカル社に行く。イスラエルでは、かすみ草は180ha作っているという。

かすみ草は、まさにすごい技術で、大変勉強になった。この暑いところで、周年栽培の仕組みを作っていることが、すごい。日本では、考えられない技術である。

パスカル社の社長は、社長といってもほとんど農家風である。社長は、生産技術よりも、ポストハーベットの技術を自慢する。90%は、ヨーロッパに輸出しているという。イスラエルという国の農業技術の高さを認識した。

9月5日は、アグリテックの会場があるハイファの街へ向かった。

アグリテックは、私が期待した会社が出展しておらず、がっかりした。植物の組織培養の会社の展示は、いくつか見ることができてよかった。

販売コストも安く、やはり、乾燥している国の培養系は、コンタミ率が減ることがコストダウンにつながると推測。システムが確立されている。

植物の品種的には、珍しいものがなく、

世界的に共通している。

ワイ性のイチジクが、目を引いた。

灌漑システム、播種機など工夫されたものが多くあり、1日ではまわりきれない。

そして意外と日本人が多いと思った。

アグリテックの会場を後に、ティベリアという街のガレイ・キネレスホテルに泊まった。そのホテルはガリラヤ湖に面していた。ゴラン高原が見える。そこはレバノンとイスラエルの緊張が高まり、有名などころ。日本の自衛隊もPKOで来たことがある。ホテルは落ち着いた雰囲気、絵や石像などが飾っており、由緒あるホテルのようだ。

夕食はセントピーターズフィッシュであった。添乗員の小野さん持参の醤油で一気に盛り上がった。サカナにかけて食べれば、まさにそれは日本の味だった。醤油のもつ偉大さに驚くと共に、その醤油瓶は、夕食の間に空となってしまった。

ホテルで夜の食事を終了後、国籍不明のワインバーに出かけ、おいしいワインを飲んだ。イスラエルは、ワインのおいしいところでもある。われわれは、ワインをおいしいおいしいといいつて、夜遅くまで飲んでいった。そのおかげでぐっすり眠れたのだが……。

9月6日朝、テレビを見ていたら、テロリズムがあったことを知った。西郷さんによると、「ハイファとティベリアで、イスラム原理主義のテロリズムがあり、クルマが爆発。ティベリアでは1名重症、1名けが（結局は2名が死亡…いずれもテロリスト）」ということだった。ティベリアでは、はじめてのテロリズム

ムだそうで、地元の人々がビビっていたそう。

わたし達は、夜遅くまでワインを飲んでいたので、「日本人は、テロリズムがあっても、すごい」といわれたそう。

ただ、知らないだけなのにね。

観光客も、ホテルをキャンセルしたそう。

そうだな。夜、街に出てもあまり人がいなかったものね。

ポリスが多いなどは、思ったが……。

1999年9月6日(月)

朝早くガリラヤ湖の畔を散歩する。ガリラヤ湖の水はきれいとは言えない。魚たちが表面に浮かび口をパクパクさせている。水が酸欠状態になっているのだろう。ゴラン高原から昇る朝日は実に神秘的だった。鳥も多くさえずりが聞える。

昆編集長があらわれ、ガリラヤ湖で泳ぐ。実に若い。あとで聞いたが私と同じ年という。

ティベリアから南下してヨルダン川の横を走っている。今日一日農家をまわりながら死海へ向かう。この川の水でイエス・キリストが洗礼を受けたという有名な川といわれる。しかし小さな小川である。

キリスト信者は、この川を見てがっかりするという。水が豊富とはいえない。

行く途中、一面にワタの畑が広がり、白いワタが弾けてとてもきれい。大地に雪が降ったようだ。バスを停めていただき、ワタの畑を写す。

空気が乾燥しているのか汗をかかない



スプレー菊農家の冷房用バットアンドフィン（古川正樹氏撮影）



全土に張り巡らされた灌漑パイプ。下水も再利用され、その水は赤色に塗ったパイプで配管されていた（小塩幹雄氏撮影）



圃場に散乱するマルチフィルムの残骸（古川正樹氏撮影）



鉄条網に囲まれたヨルダン河西岸地区でオーガニック栽培を行うハーブ農家のハウス（古川正樹氏撮影）



ユーバル社のハウス。傾斜地形を利用した有機培地耕を行っている

がミネラルウォーターが自然とほしくなる。1日に4本も飲む。

バラ農家、乳牛農家、キク農家、そしてハーブ農家。

それぞれを通して感じるのには、この暑い国で実に工夫された生産をしていることである。外は暑いハウスの中は涼しい。フィルム技術、ハウスの設計など、暑さ対策が徹底している。

陽ざしが強いので光合成が盛んであるが、フィルムの熱線カットで植物の葉面温度を上げないという。植物の原理を知り抜いた効率的な栽培技術を持っている。

死海に面したクラウンズ・プラザホテルに入った。夕食を終え、プールでひと泳ぎした。今年の初泳ぎである。沖縄にいて泳がなかったのも残念であるが、イスラエルで泳げるのもいいものだ。海風が強くとて寒かった。まずは今日はゆっくり眠ることにしよう。

1999年9月7日（火）

今日は、雲が少し、空に浮かんでいる。ティベリアから死海に向かう間の空には、雲さえなかった。水分がないのだが、死海上空には、水分があるようだ。

朝は、5時頃から太陽が上がる。6時になった頃、ホテルの前の塩湖（死海）に入った。

海は、ぬるめ。私の好きな風呂の温度よりは、少しぬるいかなという感じである。ぞうりを履いて、海に入りなさいといわれていたので、沖繩から、健康サンダルをもつていった。海の底は、すべて

塩だ。底には、砂がない。塩がコンベイトウのようになっていて、ごつごつしている。それが、一面敷き詰めてある。塩の採掘は、スコップがあればできる。

最初に海に入ったら、泳ごうという意志を持ってはいけなことを痛感した。

手で波をかこうとしたら、しぶきが、目に入って、痛いこと。なんて表現したらいいのだろう。目が、ぐりぐりする。なにもしないこと。身体力をすべて抜くこと。それで十分に浮かぶ。

ふかりふかり。スーパーマンのように、手をのばして、足を伸ばして、浮かぶ。

いいね。海の上で、スーパーマンしている。おおむけになって、空をぼんやりとながめる。風がわずかに吹いて、波ができ、海の上を漂う。何も力を入れることはない。

空に浮かぶ雲をぼんやりとみる。太陽が、少しずつ上がっていく。朝がやってくる。

10数名くらいが、海に浮かんでいる。女性が多い。少し太目のご婦人方である。

男性は、フランス語らしき言葉を話している人達がいる。

ただ、ぼんやりと浮かぶ。身体をなでると、ヌルヌルする。

それを、なでていると、気持ちがいい。身体の脂肪が溶けたすような気分。

身体を愛撫されているような感じ。ここにキュウリをもつてくれば一夜漬けは、すぐにできてしまう。

海から、塩のコンベイトウを拾い上げ、そして部屋にもっていく。ペランダで、乾かす。海水パンツも干したら、1時間



エルサレムの近郊で見たベドウィンの集落



聖地エルサレムに莫大な金を投じて墓を求める世界のユダヤ人の富豪たち

雰囲気は、どう表現したらいいのか分からない。私が、一番残念に思ったのは、街のいたるところにゴミがあつたこと。足の踏み場に困るようなゴミの大軍。生ごみも、缶も、瓶も、そしてダンボールもごちゃ混ぜになって、捨てられている。なんとという国だろうと思つた。西郷さんは、清掃会社がストライキしているのと言つていたが、街のほうほうは汚い。農地は、廃ビニールがきちんと片づけられていない。また、環境保全の概念が育つていない。緑化事業は優れているが、環境美化はおこなれている。伊勢神宮もつ荘厳さのうえに、ゴミが落ちていない様子は、やはり日本の神様。

ピア・ドロローサの道は、アラブのヒトも、イスラエル軍で自動小銃をもつているヒトも混在して歩いている。そして、おみやげやさんが薙めいていて、異様な光景であり、子どもたちが絵はがきを売っている。年中お祭りをしているようである。こういう雰囲気を猥雑というのであろう。

エルサレムでの夕食は、中華料理。マンダリアンというレストランで、漢字では、「君子堂」と書いてある。中華料理にかかわらず、老酒、紹興酒がない。まずはビールで乾杯。

イスラエルのビールは、マカビという銘柄のグリーンボトルが一番おいしい。これが、なかなか店に置いてなくて、ブラウンボトルがでる。この中華料理屋には、グリーンボトルのマカビがあつたので、ご機嫌だつた。私は、ビールはデンマークのツボルグが好きだが、昼に飲んでみたら、ホップが効きすぎていて、お

いしくなかつた。やはり、土地の気候にあつたビールがおいしい。

料理の味は、表現のしようがない中華料理だつた。とても甘い。コーン・スープ、春まきもどき、ブタのスペアリブ煮、炒飯、エビ、イカのてんぷらなど……私とのなりが、バスの運転手さんだつたので、エビやイカ、そしてブタなどを「禁断の味」といつてすすめた。甘くいものはいい」という簡単な返答。甘く



爆弾テロがあつたのも知らず、ガリラヤ湖畔での酒宴

て、不思議な味だつた。

今日は、遅くまで今回の旅行の反省会をやつた。

今回の参加者は11名で、かなり個人的な人々と一緒に旅行で、刺激的だつた。また、私と相部屋の飯島さんとは、その中でいろんな討論ができ、今までは違った充実感を味わつた。

1999年9月8日(水)

ホテルハイアットを出る。

恒例の、電話代の精算。

Eメールにアクセスしていないにもかかわらず、電話代が計上される。

これを抗議して、精算する。これは、ホテルの対応がよくわかつて面白い。

パプリカの生産者。300坪で20tを生産する。日本では、10tもいかなないので大きく違う。5月から11月に収穫する。ハウスが7・5m、軒高5mで実に大きなハウス。密植。2本仕立て。

今回のイスラエルの旅行は、私が、当初考えた以上に豊富な刺激を与えてくれた。最近では、台湾や中国に頻繁に行き、そして4月には、アメリカに行つたが、このイスラエルほどいろんな意味で刺激を与えてくれるところは、なかつた。また一緒にいった人たちが、それぞれ個性をもつていたので、会話が充分楽しめた。

最後の夜は、テルアビブの地中海の見えるパノラマレストランで、イタリア料理を食べる。最後の晩餐にふさわしく、まずはおいしいワインから。

ヨルデン、1995年、赤。

実においしい。深みがあり、渋さも適度にあり、大人のテイスト。

ピザ、スパゲッティ、スープ、サラダ、そしてハンバーグステーキ。

少しずつ食べて、みんなで味を批評しよう。まず、ピザは実にチーズがおいしい。スパゲッティは少し柔らかめであるがトマトソースがおいしい。

サラダはピタにつけて食べればおいしさは最高。

ハンバーグは牛肉だけしか使用していないので、あまりうまくない。



とにかく、わいわいがやがや、みんながうち解けて、やつと料理も終わる。おいしい料理でした。

おいしい料理でした。

昆編集長から、無事に旅行が終了しそうなことについて、感謝の言葉があった。そして昆編集長は、イスラエルの感想を、「灌漑、ゴミ、オッパイ」と言っていた。言い得て妙である。イスラエルのゴミは、尋常ではない。目の前にゴミが落ちていても、かたづけられない。これは、軍隊の出動を待つしかないのかもしれない。

そして、イスラエル女性の華奢な身体に異常なオッパイ。「巨乳」というより、「爆乳」になっている。その原因を究明する必要がある。乳牛のホルモン使用が影響しているのかな。

1999年9月9日(木)

イスラエルの空港を出るとき、質問責めにあう。ふたり一組となって、質問をする。バックは自分でつめたか。なにか贈り物をもたらなかったか。武器などを持っていないのかなど…。実に騒然たる検問である。

チューリッヒの空港に着いて、ツーリストの添乗員の小野さんと、スイスの街へ行こうという話になる。まず、イミグレーションに行く。実に簡単で、すぐ通ることが出来る。スタンプも押さない。そして、2階建てのきれいな汽車に乗って、中央駅に行く。中央駅は、とてもきれいだ。イスラエルとは違う。

きれいだというのは文明のたしかさかもしれない。

街を歩く。川が流れ、電車が走る。ベンルマが実にきれいに磨かれている。ベンツ、ボルシエ等々…。街は落ち着きもち、空気がえ心地がいい。

川には、鴨と白鳥がのんびりと泳いでいる。飛行船が、空に、ぼかりと浮かんでいる。教会の塔が、天に向かって伸びやかに、建っている。

あるひとつの教会に入る。ステンドグラスが、とても素敵だ。しーんとした、静寂の中に、ステンドグラスは、太陽の光を浴びて、輝いている。キリストの磔と、聖母マリアが赤ん坊を抱いているいくつかの絵が、新約聖書の物語をつけている。絵はがきを求めたら、ステンドグラスの絵は、シャガールが描いたという。シャガールの不思議な雰囲気、教会にもあらわれている。実にいい感じである。

教会を後にし、川に沿った街の飾りを見る。ゼラニウムが、とてもきれいで、街の窓に飾ってある。リボンが、家を包み込むようにしてある。

愛嬌というか、無駄というか、そういうことが生活文化なんだ。

イスラエルの中では、息子タットに買うおみやげは、何もなかった。戦争のものはいやだし、聖書関係も、あまり乗り気になれない。それではスイスのナイフかなと思ひ、店で買う。スイスのナイフは、芸術品である。多機能を、ひとつの中に、コンパクトにおさめてある。キャンプ用のものを買った。子供にナイフを与えるのは、今学校で禁止されている。しかし、自分でそのナイフの意味を理解し、自分で管理するということも、ひとりの発展途上の少年として大切なことかなと思う。

カミさんには、死海のアハバの石けん

イスラエル国籍になった日本人として思うこと

イスラエル国公式ガイド 西郷広暁

イスラエルに来て以来、自分の人生の半分にあたる16年が過ぎました。あつと言う間だったと感じています。日本では経験できない事、ヘブライ語の習得・キブツでの集団生活・ガイド免許習得・ユダヤ教への改宗・イスラエル軍への召集・戦争・テロ等。貴重な経験を持たた自分はとてもラッキーであると感じています。

外国に出ると自分が生まれ育った国、日本の良いところや悪いところが見えるのは、外国に出た方なら誰でも経験するところでしょう。悪いところが多すぎて「アンチ日本」になる日本人もいるようですが、私は自分の生まれ育った国である「日本」、それに自分のルーツであるものを否定的に見ることは出来ません。どれだけ外国語が出来ようが、現地人と結婚していようが、「日本人」である事に誇りを持ちながら今でも生活しております。

「誇り」と言うものを現在の私の世代は感じているのでしょうか？私も日本の教育を受けましたが、第二次世界大戦の為に今までの日本の過去は全て駄目であったと、否定的に教育する傾向が強すぎると感じます。戦争経験者の方でも当時の事を話そ

うとする人は少なく、どちらかと言えば忘れようとしている方が多いのだと思います。私がこの様な事を口に出すだけでも「君は当時の日本を知らないのだから…」と言われたことも何度かありました。

イスラエルでは「平和は勝ち取るもの」、「6百万人の虐殺を二度と起こさない様に過去を忘れてはいけない」と教育します。イスラエルの初代首相であるダビッド・ベングリオンも「未来を知りたければ歴史を良く勉強しなさい」と言っています。

日本も唯一原爆を経験した国であり、やはり多数の戦死者を出したからこそ現在の平和があるということは事実です。全ての過去を悪いと決めつけるのではなく、何が良くて悪いのか、正確な歴史を後世に伝え、自分の国に関して認知するのが大切だと思います。

現在では日本人より外国人の方が日本を熟知し、尊敬の念を持っている人が多いようです。日本という国がどれだけ素晴らしい国であるか、またその国を造り上げた民族であるという自覚を持つことで驕らず卑しまず、今後の日本人は本当の意味で世界に飛躍出来るのではないのでしょうか。

は、と思い、「エーデルワイスの押し花」を買う。映画「サウンド・オブ・ミュージック」の中でも印象的に演出された花。

花言葉は「永遠の愛」だったかな。これで、おみやげはピタリと決まった。

川の横のレストランで、スイスのビールを飲む。少し褐色がかかった色で、絶妙に泡がある。麦芽を焙煎したタイプの濃厚な味。

イスラエルのシンプルな味とは違って、豊かな生活がこしらえた味がする。

GパンとTシャツのレゲエ風の青年が来る。男と女である。

男は、ギターを弾き、女性は、アルトサクスを吹く。

なにか逆みたいで、女性のアルトサクスが、奇妙かもしれない。

いくつかの曲を弾き、そして最後はギターだけで、「禁じられた遊び」をひく。

そのあいだに、女性は、帽子をもつて、お金を集める。

街を歩く女性たちも、服装が、やはりイスラエルと違い、自分という個性を強調しているようだ。

昆編集長と、スイス、イスラエル、そして日本について語り合う。

スイスは、金融王国として世界に君臨し、その利益で、スイス国民を養っている。

街は、伝統を守り、新しい中でも古い建物を大切にす。

いわゆる減価償却が終わっている街。

日本や、イスラエルは、未だに、設備投資をし、街をつくっている。

その違いが大きい。

イスラエルという国は、自分たちの国

いとおっしゃられた。都合がつけば参加してみたいと思う。

倉持康文氏（株式会社くらぜん 代表取締役社長）

肥料商の経営者。現在青果物の集出荷業も行う。非常に仕事に意欲的。今回のアグリテックでは、一生懸命、出展資料について熱心に情報を収集されていた。農業についてもご自分なりの意見を持っている人。

小谷栄二氏（株式会社ガラガーエイジ 代表取締役）

北海道で電気柵の会社および牧場も経営。牧場は大規模な草地型酪農を実践。庄司氏と農家経営者教育にも取り組んでいる。野生動物と人間、家畜との共生を目指しているすばらしい方。普及員OBを一部社員として雇っている。前職普及員は仕事をちゃんとしますかと尋ねると、ちゃんと仕事をやっていただけの人しか私は採用しないとおっしゃられた。良く仕事をやってくれているとのこと。今回のツアー終了後もヨーロッパの酪農を勉強すると言って庄司氏と共に旅立たれた。

川瀬善業氏（株式会社フローラ 社長）

HB-101という、植物活力剤のメーカー、フローラの社長。三重県で杉、ヒノキ、松、オオバコの抽出物を製造販売。今回はイスラエルにも販売の足がかりを求めて参加。190kg近い巨漢で足サイズも30cmとかつぶくも良く、見るからに育ちの良さを感じる人（もしや山林王？）。有りとあらゆる方法、場所で商品の宣伝を行っているとのこと。お客様から予期しない効果や使用方法についても報告がくるとのこと。

飯島譽夫氏（株式会社タキ・オーガニック 本部長）

コンピューター会社インテルや建築会社社員を経て、ある日農業関連の会社を3人で起こす。現在は、特に養液土耕のシステム開発に力を注いでいる人。工学関係が専門のため、その方面からの農業技術に対する切り口が鋭い。また、生産資材の検討、検証を農家と共に実施すべく、グループ化を図っ

ている。農家は私の所属する普及センター管内ではないが、近隣の私の存じ上げる農家も加入の方向らしい。こういった農家の動きがでくと、普及員も努力をしないではいられないと思われる。

中村泰明氏（農事組合法人興里農場 代表）

今回のコーディネーター。イスラエルの農業、特に農業資材、園芸技術に関して詳しい。氏がいなければ、短期間でこれだけの視察は粗めなかったと思う。元は高級外車の輸入販売を手がけていた。和歌山で切りバラを生産する農業経営者であり、イスラエルのハウスやフィルム等の農業資材の輸入販売も手がけている。外国に行っても物怖じしないで商談を進める力量はずば抜けている。

昆吉則氏（株式会社農業技術通信社 代表取締役）

今回のツアーの企画者。氏の農業に対する強い思いが誌面にも表れている。ツアーの日々においても、夜は遅くまで語り明かし、朝は早朝より起きて散歩や水泳をする超人的な人。特にガリラヤ湖でまさか泳ぐとは誰も思わなかった。

小野健一氏（近畿日本ツーリスト株式会社 ツアーディレクター）

今回ツアーの添乗員さん。大ベテランで仕事にそつがない。本来は英語圏の方が得意なので、今回は大変でした。お世話になりました。

西郷広暁氏（有限会社興里 イスラエル支部）

ツアーのガイドさん。日本人であるが、イスラエル国籍を所持している。ガイドだけでなく、日本企業のイスラエル進出の拠点ともなっている人。経験も豊かで、何を欲しているかすぐ察知のできる方。コミュニケーションもうまく、イスラエルにもう一度来ることがあれば、またぜひともガイドをお願いしたくなる様な人。イスラエルの方達から、「アキ、アキ」



特集
日本と日本農業を見る
『合わせ鏡』としての
イスラエル



をつくるという、アイデンティティをもつ。スイスも、長い間、永世中立国として、平和を守り、ドイツ語、イタリア語、フランス語、そして現地語の4つを公用語として、ヨーロッパで、その位置を保っている。

日本という国は、アイデンティティをなくしている。

そのアイデンティティをどう作りあげていくのか？

もしくは、そのアイデンティティを求めること自体が、日本には無理かもしれない。

などと話しながら、飛行場に戻り、そして、成田行きの飛行機に乗り込んだ。さて、もうあとは、日本に戻るだけだ。

ご苦労様でした。

ご一緒させていただいた個性的で楽しい方達

古川正樹

今回のツアーの参加者は添乗員、ガイド、コーディネーター、企画者を含めても14名のため、アットホームな旅行となりました。

私以外は皆さん経営者またはその候補者の方達で、私と一緒に参加した方達とのふれあいが、経営者としてのものの考え方や行動を学ばせていただく機会にもなり、視察共々、非常に有意義でした。この交流がなければ今回の参加経費は私にとって、高いものになっていたことでしょう。

以下に恐縮ですが、皆様の印象を述べさせていただきます。

鷺坂知明氏（農業者）

就農後2年目のイチゴ生産農家。非常に素直、ハンサムな好青年（24才）。私と相部屋だった人。この若さでこういったツアーに参加できたことは、消化できなかった点もあると思うが、経営観の醸成にやがて血となり肉となると思われる。特に経営者として活躍中の皆さんから助言を頂けたことは彼にとって貴重な体験だと思う。

小塩幹生氏（株式会社ライスアイランド 企画室長）

岐阜の米穀商。非常にフレンドリー。私のことを今回の参加者の中で唯一まともな人間と評していた。他の方達は、何を考えているのか判らない者ばかりだと言う。しかし、裏を返せば私は単純な人間で心を読みやすいということだと思う。つまり私は他の方々のように経営者には向かないと判断が下されたわけだ。このツアーの目的は、ニュービジネスのヒントを探るためとのこと。氏は又、ツアー終了後もチューリッヒからレンタカーで、スイス～スペイン、そしてモロッコと旅をして帰国すると言う。旅をしながらでもビジネスチャン

スのヒントを考える。案外、経営者とはこういう方達でビジネスを楽しんでおられるのでは。そう思わすような人。

関祐二氏（農業コンサルタント）

ご存じ、農業経営者でおなじみの方。茶園の経営者にして、土壌の専門家。氏の素晴らしさは、土壌肥料の基本を判りやすく説明できることである。今回は奥様のプレゼントとして、ダイヤの指輪をお土産に購入された。

土下信人氏（有限会社ゆめじん 専務取締役）

自称、謎の中国人と名乗るほど、東南アジアの華僑の雰囲気漂わす方。組織培養を天職と思い、独立。台湾に農場も持つ。現在、沖縄在住で、この地の産出品を活かした資材を多方面に開発販売している。有機農業関連資材、健康食品、化粧品。今回のコーディネーター中村氏ともビジネス・パートナーで豊富な知識情報を持っている人。よく海外にも出張されるとのこと。

庄司昭夫氏（株式会社アレフ 代表取締役社長）

「農業経営者」でもおなじみ、ファミリーレストラン「びっくりドンキー」の経営者。物腰が穏やかで紳士的な人。東北の旅館の子息であったが、自分がやる気になれる職業として外食産業を展開する。「食とは人を良くすると書くと先輩に言われました、だから私は食に係わる仕事をしています」と述べられた。ティベリア（ガリヤラ湖畔）の夕食時、「今、食品産業界は農業のことについて非常に興味を持っています」と言われた。現在のお仕事をする動機を聞くと、雑誌「商業界」の影響が大きいとのこと。私も購読（実はつんどく）していますと話すと、ぜひ毎年箱根で行われる研修会に出席しな